

昭和二十九年七月二十五日発行(毎月一回十五日発行)
第三種郵便物認可

(通第六七号)

慈

光

第六卷

第十號

目次

| | |
|----------------|---------------|
| 『大いなる受入れ』…………… | 池山栄吉……………(1) |
| 池山先生随聞私記…………… | 花田正夫……………(6) |
| 大經上卷全体の感じ…………… | 福島政雄……………(8) |
| 酒見先生の御手紙…………… | 西原礼藏……………(11) |

『大いなる受入れ』

池山 榮 吉

【来る十一月八日、池山先生の十七回忌をむかへることに
なりました。先生の御慈育を徳ぶよすがとして、嘗て名
古屋の信道会館で講話せられた速記録を福田正治氏の快
諾を得て、ここに記載させて頂きます。】

親鸞聖人が、まだ十九歳の青年として、あの磯長の廟
窟、聖徳太子の御陵へ参詣されたのは、もう荒野に於ける
一人ほつちの旅人であつた。

それから十年、二十九歳まで、佛教の学林を、あつちへ
行つたり、こつちへ行つたりして、さ迷つた拳句のはてに
六角堂の参籠となつた。あの六角堂の参籠は、即ち二河の

と隠さず聖人が打ちあけられると、そこで法印はいたく
同情して

「本当にお気の毒だ。どうです、私の先生の、あの法然
上人の許においでになつては……」

と、かう勧められた。聖人は渡に船と喜んで、吉水の禪
室の方へ足を運ばれた。その足取は軽かつた。観音の霊告
や、親友の聖覚法印の勧めによつて、ああ、この法然上人
こそは、私に正しい道を教へて下される眞の善知識に相違
ない、と云ふ確信、宿善開發の契機を知らせた足取であつ
たらうと思ふ。

「世くだり、人つたなくして、難行の小路まよひやすき
によりて、易行の大道におもむかんとなり」

と御伝鈔にあるのは、当時の消息を洩らされたものと思
ふ。失はれずに起つた、最後の希望の閃きである。

たとひ大千世界に みてらん火をも過ぎゆきて
佛の御名をきくひとは ながく不退にかなふなり
かう云ふ事実の実現の直伝である。

子の母を憶ふが如くにて 衆生佛を憶すれば
現前当来とほからず 如来を拜見うたがはず
今はその時である。

聖人には、今や、一切の雲霧、一切のわだかまり、一切
のはからひ、一切の障碍、一切の邪見、一切の何々、凡そ

前に立ち尽した旅人であつた。一心凝つた祈誓である。そ
れを法然上人にあてて見れば、黒谷の報恩藏に於ける、細
意周到の一切経の繙説にあたる。

六角堂の帰途、うなだれて足の運びも重く、四條の橋を
通りかかつた時に、先達の聖覚法印に出会はれて、「ヤア
今日は」といふやうなあんばいで、聖覚法印が親鸞聖人の
様子を見られると、顔色憔悴、形容枯槁、見るも哀れな
すがたである。

「あなたはとうなされた」「実は、信仰問題で悩んで居
りまして……」

あつてならないものを、悉く取り払ひ、打ち砕く、電光が
、目睫の間に迫りつつあるのである。

さうして、その電光一閃の結果、唯一無二の無くてはな
らない、或物を獲得する刹那が、電光をはらんだ黒雲のや
うに、グン／＼と押寄せて来てゐるのである。何とはなし
に忝けなさに、身の毛のよだつ思ひが、聖人の心に感ぜず
にはゐられなかつたらうと思ふ。それは、佛の引接の力の
あらはれである。あの『引接』といふことを、引きよせる
ことだ、と、かう単に思ふだけでなく『引接』と聞いて
「あ、あの事を言ふんだな」と云ふ、信仰的、事実の體
験があつて欲しい。それが「大いなる受入れ」の手ごたへ
とも言ふべきものです。それ等の事は段々のうちに、引接
といふ実感に就て、お話をする積りでありましたが、さて
今日は、そこまで話が進まぬだらうと思ひます。

そこで、親鸞聖人は、主観的には自ら足を運んで、客観
的には、本願の力に引き寄せられて、吉水の禪室にたどり
着かれました。

その時の簡潔なる事実が

『親鸞にあきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまい
らすべしと、よきひとのおほせをかうぶりにて、信するほか
に別の仔細なきなり』

で、この吉水における、両聖人の会見たるや、何たる崇

高な、何たる偉大な場面、凡そこの世にあり得べき限りの莊嚴な場面であつたらうか。私にとつて、無くちやならぬ二人の人の会見である。他の人々は、古往今来、何億、何十億、無数にあつたかも知れないが、唯一人として、私に無くちやならぬと云ふ人は居らない。ところが、この法然上人と親鸞聖人、このお二人だけは、私にとつて無くてはならない、このお二人が無くては、私の今日は無い。私にとつて無くつてはならない、この両聖人の会見であるその時、親鸞聖人の胸の中に点火された彌陀の信光が、七百年の今日、お互の胸の中へ、それからそれへと移されて行くのである。

さて、この会見の場合、親鸞聖人は、法然上人の許へ何を持つて行かれたか。親鸞聖人の身についたものは二十九年の體驗である。ただそれだけでございます。さうして、その體驗の内容はと云ふと、何一つとして積極的、肯定的のものはない、あるとすれば、それはただ熱烈なる求道態度であります。それも親鸞聖人自身から見ると、今はただ不可能視された望みにしか過ぎない。それを希望とするには、余りに可能の程度が尠い、単なるのぞみに過ぎない即ち『地獄は一定すみかぞかし』の消極的、否定的推定に過ぎない。

尤も『地獄は一定すみかぞかし』と言ひながらもまた、

そこで、相縁奇縁、善知識と云ふものは有難い。親鸞聖人は、二十九年の體驗を持つて行つて、それをブチまけられたんです。これにこたへ給ふ法然上人は、何を持ち合せてゐられたかと云ふと、四十三年の體驗である。法然上人が『予が如きの下機の行法は、法藏因位の昔、かねて定めおかるるをや……：順彼佛願故』と白道へ飛び込まれたのは四十三歳の時ですから、それまでの體驗です。

ところで、法然上人が、親鸞上人に一体どう云ふ話をされたかと云ふと、これは私の想像であります。然しこれは許さるべき想像で、大體、見当を失つて居らぬ積りであります。

『私もいろ／＼学問研究をしました。どうにも、かうにも仕様なくて、地獄へ墮ちるより外仕方がなかつたが、善導大師の觀經疏文「一心専念彌陀名号……」を讀んで「予が如きの下機の行法は、阿彌陀佛の法藏因位の昔、かねて定め置かるるをや」でもつて、念佛を称へた、それなんだですよ』

と云ふので、その體驗には、四十三年の體驗には、二つの方面があります。自力修行と他力攝取で、しかもその二つの方面は、同時に存在すると云ふのではなく、自力修行の方面が無くなつてから、他力攝取の方面が開けると云ふ順序であります。

あてもない最後の希望を含有してゐる、それが実に、人間の不思議であると云ふ所以であります。積極的には、何一つ向上発展に役立つべきものが無いんです。胸中無一物、『いづれの行もおよびがたき身なれば……』と云ふ箒でスツカリ大掃除をしてつて、胸の中には塵ツば一つ残つてゐない状態であります。併し、この塵ツばも残つてゐない、胸が空虚になつて了ふのが有難いことで、これが『大いなる受入れ』の準備だ。いま言つた消極的の方面に対して、他の一面に就ては、法然上人に対する、至大の信頼と云ふ、積極的希望の方面が開けて来て居る。自力聖道の門から他力淨土の門への急転向の試みである。

で、本朝淨土の元祖、法然上人を訪ふべく吉水の禪室を目掛けて歩み寄る一步は一步より、法然上人に対する、受入れ、信頼の念の深められてゐるは当然である。

それでは法然上人が、親鸞聖人のその絶対の信頼に値する、或物をもつてゐられたらうか。仮りに親鸞聖人が、その当時の名僧である梅尾の明慧上人を信頼して、梅尾の庵を叩かれたとする。併し、明慧上人は親鸞聖人の信頼に副ふ事は出来なかつたであらう。明慧上人は、親鸞聖人の機に適ふ或物を持合せて居られないからである。酒を買はうとしたら、醬油屋に行つては酒は買へない、酒屋へ行かなくつてはならぬ。

ところで、法然上人の持合せと云うたら、それは自力の修行で、親鸞聖人の今迄に體驗されたそれに、よく／＼似て居ります。恰も、シヤウブにカキツバタ。サツキにツツチにキリシマが似通つて居る如くに、その程度を同じくしてゐるところのタイプである。

法然上人が現在に得て居られる、體驗しつゝあられる攝取方面を管見すれば、信仰方面を説くには、どうでもその自力作善の方面、即ち聖道方面のその體驗から話して行かなければならない。

ここに法然上人の語り出される一言一句は、皆悉く親鸞聖人の現に嘗て體驗されたものでないものはない。

親鸞聖人の語り出される片言隻句も、これまた法然上人の前半生の體驗の中に含まれてゐないものはない。

法然上人と親鸞聖人、それは前後の違ひこそあれ、同じ轍を踏んで行つた行者である、旅人である。我が語り、我が説くのも、皆銘々の述懐である。

法然上人は、いま親鸞聖人の前に立つて、我が來た道の案内をして行かれるのです。告白は案内である。その道は進むに随ひて益々峻しさを増すものであつたが、現に親鸞聖人の歩んで來られた道であるのである。後人は先人の踵について、両者の歩調はひとつである。足の歩調の合ふのは、心の歩調の合ふ前兆である。

二河白道と同じこと、絶壁と深潭、そこに一條の綱が

かつて居り、毒蛇の巢窟の叢、猛獸の蟠居する原始林、や
やともすれば足をとらうとする蕨葛、あまつさへ、劍を按
じて忍び寄る怪物の気配さへある。もう一進も三進もいか
ぬ、足の踏所も無くなつたと思ふとたん、先達の法然上人
が立ち止まり指される方を見ると、意外にもその一方に未
曾有の光景が展開してゐる。さうして細々ながら、確かに
憧れの彼岸への道がついてゐる。

「ただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」

これが即ち先達法然上人の指図である。眼前に展開され
た眞光景であつたのである。この光景は、これまで足を運
んで來だ人にして、はじめて見られる光景である。且つ先
達の指図によつて、はじめて見える不思議の境地である。

その指図を東岸の声と云ひ、東岸の声の主を善知識と云
ふ。難行の小路から、易行の大道に赴かんとする親鸞聖人
の胸に、急速のテンポを以て高まりつつあつた法然上人に
対する信頼は、今現にその人と談合することによつて最高
潮に達した。

そもく法然上人とは如何なる人か。他力念佛の興行者
である、念佛の行者である、體驗者である。

あの繪像に見るやうな目鼻立のすがたに接してゐるとい
ふだけでは、本当の意味に於いて、まだ法然上人に会つた
とは云へない、それはただ外形に面したと云ふに過ぎない。

外形は人でなく、心が人なのである。

佛の恵みを體驗された法然上人を見た時、はじめて法然
上人のその人格に接したと言へる、親鸞聖人は、斯うして
法然上人に対面されたのである。

自力聖道から転じて、他力淨土、本願念佛に向つたいき
さつを、法然上人から聞いた親鸞聖人は、十分にそれを解
することが出來た。それは自分の持ち合せた材料を整頓す
るに過ぎない。

法然上人のその言葉を聞けば、彌陀の直説である。法然
上人に対する信頼が絶対化すると同時に、そのまま法然上
人の本願念佛の信仰に一致した。その刹那念佛申さんとす
る心が、心の底から、押し出されて来るやうに起り、本願
招喚の勅命が、自分の称へる念佛として聞えた。また「念
佛して彌陀にたすけられまいらすべし」と云ふ、よきひ
と、法然上人の仰せは、直に本願招喚の勅命である。東岸
の声はそのまま西岸の声となつて、さうして同じ声が、我
が口から洩れ出て來るのである、同じ信心の泉から進り出
るのである。

池山先生 遺詠

よきひとのおほせにききて御名をよべば

よばはせたまふ御声きこえぬ

池山先生隨聞私記

佛の悲心

幼兒が道路で無心に遊んでゐる、そこへ汽車が段々と接
近して來るが、幼兒は平気で遊び耽つてゐるとする。若し
誰かこの有様を見つけたら、声を限りに危いと叫びながら
身の危険をも忘れて救はずには居られまい。それは普めら
れるためでも、親がたのむからでもない、ただやむにやま
れぬところからである。

幼兒と大人との間でもさうであるが、まして眞実の悟り
の境界にある佛はどんな思ひで救ひの御手を迷妄のわれら
の上にのべ、思ひをこらして下さつてゐるであらうか。

佛の眞実

奈良に遊び、山田を訪れると、道々に旅館やら土産物店
があつて、沢山の客引がしきりに呼びかけるが、懐中無一
物の旅人には、どんなに優しく美しい喚び声もむなし。
三千年來、世界には無数の教があつて、ひつきりなしに
呼びかける『この道こそ眞実である』と。実に引手あまた
の感に堪へない。然し『會無一善』の身にはすべて空しい
呼び声である。

ただ一切の客引からも呆れられて、誰一人として寄りつ

花田正夫

かない無一文の旅人に、最後まで呆れず捨てず喚びかけて
下さる声の主こそ眞実者である。

招喚の聲

或日外出しようと洋服に着換へネクタイを結びながら、
カナリヤの籠に近寄ると、チュウ／＼と籠にしがみついて
しきりに呼びかける。そこで日頃小鳥の世話をしてゐる娘
の愛子呼んで『小鳥が人間に物を言ふよ、試して御覽』
と言ふと、何回となく愛子が近寄つて見るがカナリヤは一
向平氣である。ところが私がやると何度でも同じ所作を繰
り返して、私が遠ざかるか、よし／＼と返事をする。これ
でよいと言ふ様子をしてとまり木に落着く。

その時であつた、この鳥は二年余り私の書斎の見えるところで飼つてゐたので、何時の間にか私に親しみ、今迄一
度も應答してやらなかつたのに、私一人をめめてに長い間
呼び続けてゐたのか、と思ひ到つた時、淋しい目にあはせ
たといふすまなさと、いぢらしさに胸つまされた。そして
しばしカナリヤを見つめながら、久遠このかた私一人を呼
び続けて下さる大悲の程を一入忝く感佩した。

衆禍の波転す

熱心ではあつたが未だ若存若亡の域にあつた家内が、思ひもかけぬ胃痛の宣告をうけ、然も病気がすすんでるて手術も出来ぬといふことを知つて、それが機縁となつて、決定信のすわりが出来た。そして互に念佛申しながら『今生夢のうちのちぎり』が『来世さとりのみへのえにし』と転じたことをよろこびあつた。このことが『大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず』といふ信味を頂く始りであつた。

無碍の一道

六十近くになると時々どうにも寝つきの悪い夜がある。数日前もさうした目であつた。眠られぬままに過去の想ひ出をあれこれと辿つてゐると、あの人も、この人も、何と云ふひどい想ひ遣りのないことをしたものとかと惨怛とした悔恨の涙にくれた。ことにまだ相手が生存してゐるのであれば何とか方法もあるが、もうすでに幽明境を異にしてゐる人々に対しては全くどうして見やうもない。ただそこに現れて下さるお念佛にやはらげられ、やすらはせて頂くばかりであり、そのころを

惨怛たる 悔いの残せし 一一の

あとかたもなし 無碍の一道

と歌つて見た。夏などの海水浴場が人々に汚され取り乱されてゐるのが、一度満潮に洗はれると白砂清々に転ずる如くに、佛の大悲の潮に惨怛たる心の傷がいやされて行

く。これは過去及び現在に蒙る無碍光の徳である。

これにつけて現在から未来に被る無碍の心光としては
たのまるる ただ念佛の われにあり

さるべき業は さもあらばあれ

とそのころを歌つて見た。この歌の出来たのも六十歳の元旦である。歳且ます佛前に合掌し念佛したころをそのまま歌つたものだ、省みれば人生六十年、すこしは楽になれたかと思ふとそれどころではない、ホット一息する暇もない業苦から業苦の連続である。今年も、元旦早々からすでにのがれられぬ苦勞が二つ三つと控へてゐる。それも皆さるべき業で、身から出た錆である。ただしかし、そこにこそ、何時もたのみ力になつて下さる『ただ念佛』を、この私に與へて下さつてゐることのたのもしさがある。

臨末のお言葉

先生六十七歳、十月廿一日からすでに御自身の死を予知せられてゐた。十月三十一日になつて、既に呼吸も苦しく声も低く、ときれ／＼ながらも

『何も残るものはない。何も残るものはない。』

ただ念佛だけが残つてくれる、ただ念佛だけが残つてくれる。

偉いこつたよ、有難いこつたよ』

とお顔をほころばせながら囁かれた。

大經上卷全体の感じ

次に四十八願の問題であります。この四十八願の中心は第十八願であります。即ち十八願が他の四十七願の一つ一つに裏付けられてあるわけであり、そのことに就いてすこし詳しく申しませう。

第三の願に『悉皆金色』を誓はれ、第四に『無有好醜』を誓はれてありますが、お浄土に生れる者は、誰一人として醜いとか好いと云ふ差別がなく、皆悉く金色、黄金色に輝くやうにしたいと誓つてあります。元來、赤青白黒などの色のうち、黄色は何となく尊い心持をあらはす色であります。更にそれが黄金色となりますと一層尊さが現れて参

福 島 政 雄

ります。佛像を金色に彩るのもさうしたところからであります。その国、即ちお浄土には佛のまことが徹つて、そこに住む衆生に、何ともいへぬ尊さがあらはれてくる、これが『悉皆金色』といふことでありませう。

それから『無有好醜』とありますのは、その国の衆生は容貌が好いか醜いかいふことが無いやうにしたいといふ願であります。これも佛のまことの心から衆生を御覧下さる、そこに、これは美しい、あれは醜いといふわけへだてがなく、いかなる者にも美しさを見出して下さるのであります。そこには一人一人の区別はありませうが、一人一人の美しさを見て下さる、そこに佛のまことがとほつて

下さる味があります。

このことは私共人間の親子の関係でも多少そこがわかるやうであります。この子はここがすぐれ、こは仕方がないと申します。又時にひどく子を叱ることもありすが、それでゐて、親は子供の美しいところ、よいところを見て居ります。子供も亦それを感じて居りますから、親から非常な叱責をうけても「打たれても、打たれても親の杖」といふものを感じて来ます。それは一時はいかにもひどいと思はぬではありませんが、さう云ふ中にも、自分の肝腎な処を見て居る、知つてくれてゐると感じて居りますから、それが融けて何とも無くなる。親も亦、そこを見てゐるのであります。この様に第四の願をすこしこの世の親子の関係から味ふことが出来ますのであります。

斯様にして四十八願の一つ一つの願を味ひます時、夫々に十八願に裏付けられてゐることがわかります。四十八願は、佛のまことがひらかれて四十八になつて居るのであります。然し何も四十八の教にこだはることは要りません。異訳の大経には四十八でないものもあります。教は兎も角といたしまして、その一つ一つに、十八願のまことが裏付けになつてゐるのであります。

佛のまことがとほるから、宿命通、天眼通、天耳通、他心知通、などもあらはれるので、その一つ一つの説明をす

日本国民が佛法をおし立てて、日本の国を將來理想の國として、世界にそれを押し進めて行く、さう考へるのでは外面的理想であります。基督教にはさうした趣があります基督教を世界にひろめ、基督教の説く理想の國とする、といふ趣が多分にあると思ひますが、佛教にはさういふ風に、世界に佛教といふものをおしひろめることによつて理想化する、国々や民族などを理想のものにする、さういふ行き方ではないと思ひます。

つまり、佛教は、宗教と政治とか、軍隊とか、に結び合せて、世界の人々を佛教的に征服するのでなく、内面的に日本の国民が心の眼をひらかれる、それが自然に、他の民族や、他の国々にもひびく、するとお互の國家とか、社会が、何時の間にかおり合つて来るといふことをめざしてゐると思ひます。政治や軍隊と結託して行くといふものではなく、もつと内面的に深いものであると思ひます。

これは満州事變の始めの頃、いや支那事變の時でありましたか、むかうに宣撫班員として行かれた一人の坊さんがありました。ところが、他の宣撫班の人達はしきりに外面的に活動して、人民をなづけようとしてゐるが、その坊さんだけは、佛様を祭り、花をあけ、香を焚いて、しきりに佛様を拜んで居る。他の人達はこれを見て、あんなことではいかぬ、と責めますが、『まあ自分のやることを見て居

る時間ありませんが、皆佛のまことに裏付けられて居ります。

佛のまことが展開された姿が四十八願で、それが一つにおさまると十八願となります。佛は何処々々までも、何処までも、一切衆生に貫ぬき通さずばやまじとの、久遠のまことが、四十八通りにひらかれてゐるのであります。すると私共がその四十八願の何処からか、そのまことに触れて行くのであります。

何処までも、何処々々々までも徹せずばやまじとのまことであるといへばすみさうであります。実は、それだけでは漠然とした、空虚な理屈としては解りますが、それよりも自分の遠い宿世の有様が知れるやうに、遠いところまで眼が見えるやうに、諸佛の説法が聞えるやうに、人々の心が解るやうにしたい、といふ一一の願を聞かせて頂きますと、さうした何処からか、佛のまことを感ずるたよりになると味ふことであります。

このやうに私人の問題として四十八願を頂くことであります。そのまんま国家社会の問題にもなる。つまり国家社会の内面的理想が四十八願として展開されてゐる、このことについてすこし申しませう。

佛教は世界中で日本の國に一番広く深く入つてゐますが

つて下さい」と答へて、一向に何もやらうとしなかつたのであります。ところがそのうちに近処の支那の人民が気がついて、お花や、お香を持つて来て坊さんと共に佛様を拜むやうになりました。

斯様にしてそれ等の人達と一諸に佛様を拜んで居たら、次第に心が自然にとけあふやうになつた。そこでその人達の要求を聞けるやうになり、向ふも心をひらいて、銘々の希望を打ち明けるやうになり、それをその関係の人々に報告して、その願を實現したので、非常に萬事が滑らかに行き、邯鄲夢の枕で有名な、あの邯鄲十何県の宣撫は理想的に行きましたと云ふことを、たしか足利浄圓先生から聞いたことがあります。これは有難い笑話であります。一心に佛様を拜んでゐる、すると一緒に拜む人が出来、心が互に自然にとけあつて、何時の間にか邯鄲十何県の宣撫が自然に出来て来た、さう云ふのが佛法の趣であります。

『世の中安穩なれ、佛法ひろまれ』と晩年の聖人が申して居られますが、民族と民族、国と国とがむりなく融けあふ、さう云ふ態度の出る根本といふものが、四十八願にあるのであります。つまり、十八願の佛のまことを身にうけるといふことが、社会的、國家的に力になつて来るので、そこに自然に内面的國士、つまり佛國士が建現するのはさういふところにあると感じて居るのであります。

酒見先生の御手紙

西原禮藏

〔まへがき〕 私は酒見忠勢先生に、大正十年の夏季求道会以来、三十年の長きに亘り、信仰上の深い御指導を蒙つたのであります。ことに私自身がここ数年來療養生活を続けねばならなくなつて、特に恩師を追慕する情が深くなりました。ここに大正十四年十一月に頂いた、懇切丁寧な御法信を御照会申し、先生の信徳に触れて頂きたいと存じます。先生は昭和二十六年五月十八日に、四国の高松市で七十九歳の高齢を以て、往生の素懷を遂げられました。

いつもながら何のはからひなきありのままの御手紙拜見有難く、なつかしく、繰り返し拜読いたしました。

御地同朋中にも色々の事が起りました御由、大悲の親様は愈々益々悲憫の慈眼を御注ぎ下さることとたのもしく存じます。H氏いよ／＼A師に心酔の御由結構のことと存じ

ます。何時かも申しました通りA師の信仰は所謂信心より一步進みたる體驗であることは疑無き事と存じます。従つてH氏も亦、所謂信心より一步進まれたる次第でありますから、結構の次第である事は疑無きことでありませう。末燈鈔第二通目には「佛恩の深き事は懈慢辺地に往生し疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御はからひのなかの、第十九、第二十の願の御あはれみにこそ、不可思議のたのしみにあふふことにて候へ。佛恩の深きことそのきはもなしに性信房、親鸞がはからひまふすにはあらず、ゆめ／＼」とあります。

所謂信心を頂きたる人の如く、自己は第十八願の御信心を頂きたり、彼は第十九、第二十願の機に過ぎずと、第十九、第二十の願を輕視することは、親鸞聖人の御本意では

ありません。

元來、地獄一定の私であります。若し辺地懈慢界に往生させて頂いたならば、夫れ丈にても実に／＼有難い／＼次第であります。佛恩の深きこと、そのきはもなしと感涙にむせぶ次第であります。然るに佛はなほそれにも満足し給はず、辺地懈慢界どころか人間にも再生すること能はざる私、地獄一定の私を、必ず必ず、眞実報土へ往生せしめ大涅槃のさとりをひらかしめんととの御誓、その御誓故の光載永劫の御苦勞と承り、阿彌陀佛の御恩を憶念せず居られませうか。

憶念彌陀佛本願

自然即時入必定

唯能常称如来号

應報大悲弘誓恩

曇鸞大師は「遠く通ずるに四海の内皆兄弟なり、同一念佛して別の道なきが故に」と仰せられて居ります。たとひ信心徹到せる人も、徹到せざる人も、念佛の御縁だにあれば、悉く皆兄弟と存じます。十九願、二十願の機であるとして疎外すべきものではありません。然しながら、大悲の親様は飽くまで／＼第十八願の至心・信樂・欲生の三心即一心の大信心を届けねばおかぬとの大悲心であります。

近角先生が常に眞の信仰と不徹底の信仰とを際立てて御教へ下されたのは此の廣大無辺の果遂の御誓の顯現であります。決してA師式の信者を疎外せよとの意ではありませぬ。絶対の境地より道破せらるる眞偽眞仮の勘決であ

ります。決して相対的見地から出た排他的相対的主張ではありません。羅馬使節反対問題の如きも決して相対的主張ではなく、絶対の境地から発露した自然の眞偽勘決でありましたが、先生のその眞意を了解した人の勘かつたのは遺憾なことであります。

若し法兄とH氏との間に精神上非常な隔りが出来たとすれば、夫はH氏の為でせう歟、又は法兄が不知／＼の間に近角式信仰とも申すべき小さき型に立籠り相対的見地に立ちH氏に対して居られるのではないでせうか。若しさうであつたなら、それは断じて近角先生の絶対的態度ではありません。F君式の態度です。今日に於てはF君も多分態度が變つて居られることと存じますが、この相対的見地に立ちますと強い人はややもすれば排他的となり、弱き人は動もすれば、あれも同じ、これも同じと、玉石混同の似而非寛大となる。

近角先生の仰せられる、親鸞聖人の横超の態度を了解することは実に難中の至難です。その至難の横超の味を、この意気地なき私に味はせて頂き、当來のみかは、此現世において現に日々時々刻々不斷に、寝て居る間さへも加護して頂くとは何といふ有難い廣大無辺のお慈悲でしょうが。

Y法兄、或は驚き、或は怠り、若存若亡とも申すべき有

様の由、私も往年その経験があり、同情に堪へませぬ。然し一度御手のかかつた如來の御手は決して離し給ふものに非ず。又如何にもがいても決して如來の御手より脱れ出る事は出来ぬものであります。Y法兄の現在は外見如來に遠ざかる如く見えて、その実如來は特に殊にY法兄を御覽になつて居らせらるるやもはかり難く、すべては不可思議と申す外はありません。歎異抄に「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまいらすればこそ他力にて候へ」とあります通り、何事も佛天の御はからひにまかせたてまつるのみであります。

有田家の御事、内容は存ぜざるも御氣の毒の事で、御一統の御心痛の程御察し申すばかりであります。

法兄と有田武夫君に対する竹原師の御法話は実に有難く聴聞致しました。これについて

『然し私共に見ると人生問題に没頭してなか／＼お慈悲一つを喜ぶといふ事が出来ません。人生上都合よくならないといふ愚痴を常にこぼして居る有様です。九州の同朋は私はじめ人生を重んじて佛のお慈悲を軽んじて居るわけで、近角先生の御真意に徹底出来ずに苦しんでゐます』との御告白。これは竹原師の御法話を誤解せられたのではないでせうか。若し人生問題を軽んぜよ、人生上都合よ

くなりたといふ云ふ愚痴をこぼすな、そしてお慈悲一つを喜べよと教へられたと解せられたなら、それは大変な誤解です。人生問題に没頭するは煩惱の所為なり。人生上都合よくなりたといふ愚痴をこぼすのも煩惱の所為なり『しかるに佛かねて知し召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれ等がためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおほゆるなり』若し欲が無くなつたならば『煩惱の無きやらんとあやしき候ひなまし』と仰せられます。歎異抄第九章を御熟読なされたくお勧め申し上げます。

人生問題没頭の場合、人生上都合よくありたいと愚痴をこぼせばこそ、兆載永劫の御苦勞がピツタリと私の心にひびいて頂く次第であります。兆載永劫の御苦勞は空論ではありませんせぬ、生きた事実です。若し私が煩惱愚痴がなくなつたと思ふ位になつたならば、兆載永劫の御苦勞は空論となり、歴史談と流行的宗教家の所謂神話になつて了うて、眞の阿彌陀如來の御慈悲のわかる筈はありません。

若し信仰の御蔭で自分は大分悟りが開けた、あきらめがついた、愚痴がへつたと思ふ様な場合は、信仰上最も危険状態として注意を要する時と存じます。

小幡少將は現職を辞し労働問題に没頭したる後、始めて親鸞聖人の様になれない、どうかしてなりたいたいと苦しみだし、其御縁で近角先生を訪ひ、先生から『聖人のやうにな

れないものを特に憫み給ふ如來の御慈悲』と聞かされて、夢の覚めたる様に喜ばれましたさうであります。この趣旨は竹原師の御法話と同一の味ひであります。若し竹原師の御法話と私の言葉と違ふと御感じならば、それは竹原師の御法話をよくならねばならぬと誤解し、小生の言葉を、よくならぬでもよいと誤解するもので、横超の味ではありません。然し只今小生の頭がすこし理窟ほくなつて居りますから読み違ひなさらずとも小生の手紙そのものが書き損じて居るやも計り難く、小生のこの手紙の文言に拘泥なさ

孟蘭盆を迎へて

吾吐菴主人

御佛と御位牌ならべ御花ささげ七世の父母をおろがみまつる
飲食の百味なけれど御菓子そなへ果物ささげ香焚きまつる

あはれ和子往生淨土のその日より三十餘年はや過ぎにけり

みほとけにささぐるむくひの花を見て花よ花よと追ひ来し和子

世にあらば三十八の此の夏を如何に過ぐらむ吾が娘和子

孟蘭盆に御佛まつりいまさら老い行く此の身しみみとおもふ

直子逝きて四とせは過ぎぬつくづくと残りし老の身をかへりみる

あの娘あらば此の娘あらばと老の身は愚痴のおもひのむねに流るる

父母は逝きまして遠し淋し世に三十年の月日経にけり

ぬやうに願ひます。只御慈悲一つであります。念佛のみであります。よろづのことそらごどたわごとであります中に只念佛のみが眞実であります。『先生の御真意に徹底出来ずに苦しんで居ります』と御歎きの法兄を特に憫み給ふ御慈悲一つであります。小生の如きは一日として人生問題に没頭せざる日時はありません。この人生没頭の私を飽迄見捨て給はぬ御慈悲とはサテ／＼何処までの広大無辺ぞと感涙にむせぶのみで御座います。

未完

編集後記

秋もいよ／＼深まり一日一日が惜しまれる季節となりました。

一人ゐてよろこぶこゑや明け易き白道のかなたやいかに秋の風白道のかなたにつづく紅葉かな

池山先生遺詠

十一月八日の先生の御命日を前に編集いたしました。特に信道会館の福田正治氏の御好意により『大いなる受入れ』といふ題の先生の講話の速記録を頂き、在りし日の先生の息吹をぢかに感得させて頂き有難いことであります。又秃筆をふるつて、先生の追慕録の『呼子鳥』から、随聞私記を抄出いたしました。読者の皆様方のうちに直接先生に接せられて耳底に残る実語がありましたら、是非お頷ち下さいませ御教示をたまはりたいものであります

ついで御信証下さいました。御住所は東京都世田谷区世田谷町四の七二四であります。が近く他に移りません。

△酒見先生の御法信は、福岡県糸島郡前原町東町二の西原礼蔵様から頂きました。澄みきつた秋の清流の川底が手にとるやうに映るやうに、酒見先生の信眼の如何にも限なく透徹せられてゐるのに驚き、且つは温い佛智のひらめきを尊く感佩いたしました。

西原様は数年来、宿痾を郷関に養ふてゐられますが、終戦まで長らく沖繩の工業学校々長をして居られました由自在丸様からお知らせ下さいました。どうかお大切に、御恢復の程を念じて居ります。

御案内

時、十月九日午後六時半(土曜)
所、名古屋市南区駄上町二丁目二十八
一道会館 市電新郊通一丁目下車
大経下巻、東方偈講話
福島 政雄 先生

日曜講話

毎月 第一、第二、第三日曜
午後一時半
於、一道会館

昭和二十九年十月十日印刷
昭和二十九年十月十五日発行
毎月一面十五日発行

一部 十七四(郵税共)
定価 半年 百四(郵税共)
一年分 二百四(郵税共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八
編集人 花田 正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 奥川 正生

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八
一道会館
発行所 慈光社
振替口座 名古屋一〇四七〇番

慈光 第六卷 第十号 昭和二十九年十月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年 七月二十三日 第三種 郵便物認可